

八千代市郷土歴史研究会

会長 村田一男

事務局 八千代市勝田台3-24-10 牧野方

◇◇ 八千代市民文化祭 郷土史展 ◇◇

テーマ「旧高津村のすがたと人々」

とき：11月20日(土)午後1時～5時 21日(日)午前9時～午後4時

ところ：勝田台文化プラザ 2階展示室

ようこそ郷土史展へ

旧高津村のすがたと人々

八千代台駅からほど近く、発展変貌する現在の高津、高津比咩の伝説や館跡があり、古さと新しさをもつ昔の高津村を見つめた総合研究成果を発表します。

盛りだくさんの展示発表とフロアトークを行います。どうぞご覧ください。

発表内容

地図と地名で見る高津の移り変わり

高津の屋号

村中にあるたくさんの石造物

辻切りはムラの粋組み

移転した咳神様

高津比咩神社の晦日ごもり

高秀霊神という神様になった旗本間宮氏

鈴木半兵衛さんの算額

その他

会長 村田 一男

お知らせ

☆12月19日(日)12月例会

村上駅周辺の歴史散歩と忘年会

集合 東葉高速村上駅改札口 午後1時

村上駅周辺は、区画整理により大きく地形と景観を変えつつあります。

現在発掘調査中の浅間内遺跡、浅間神社、隣接地が土取された根上神社古墳、保存状態のよい神明社、黒沢池などの現状を視察し、古道や石造物、民家を観察します。

散策コース：村上駅～起木の弁天～浅間内遺跡～浅間神社～郷土博物館(休憩)～庚申塔群～根上神社古墳～神明社～黒沢池～勝田台

忘年会：午後4時半から 大衆割烹あきらにて
勝田台1-28-20 南口ホテル裏「つば八」の近く
電話：047-482-0791 会費：4000円(要・予約)

☆初春 2005年1月9日(日)

北千住(千寿)七福神めぐり

集合京成千住大橋駅 改札口前 午後1時

コース：千住大橋駅前～氷川神社(弁財天)～長円寺(布袋尊)～本氷川神社(大黒天)～勝専寺(毘沙門天)～不動院(福祿寿)～千住神社(恵比寿天)～源長寺(寿老人) その他史跡も巡ります。

・ご参加の方は必ず、12月例会までにお申し込みください。

1～3月のお知らせは次ページ

「史談八千代」第29号が発刊！

特集 「旧高津の総合研究Ⅰ」

『平成15年「三山の七年祭り」準備記録』も掲載

1冊500円(会員には文化祭で配布、又は送付します)

取扱店・千葉県立中央博物館内ミュージアムショップ
青嵐書房・藤春書房(八千代台)大杉書店(緑ヶ丘)
(有)文栄堂(大和田新田)

お知らせ

2月13日(日) 学習会

- ・市立郷土博物館にて
- ・次年度調査研究課題検討会
- ・「郷土史研通信」49号発行

3月6日(日) 拡大役員会

- ・市立郷土博物館にて
- ・平成17年度事業打合せ他

3月20日(日) 見学会

- ・通信49号でお知らせします

報告

8月15日(日) 例会

- ・18名が参加、午後1時～5時、市郷土博物館にて。
- ・11月発行の「史談八千代」29号に掲載を予定する高津調査の仮報告を資料として配布、執筆者から内容を説明し、情報交換を行いました。

8月18日(水) 屋号民俗調査グループ活動

屋号民俗調査グループは、4名の班員と石造物調査班1名が参加し、午前10時から高津団地内幼稚園にて研究会を行い、これまでの各自の調査結果を持ち寄り、まとめました。

1.「明治初期の高津村の屋号復元想定地図」の作成＝明治15年の地図の屋敷標示に、聞き取り調査による通称屋号を加筆(「史談八千代」29号に掲載)

2.「高津の屋号調査表」の作成＝「昭和15年度高津比咩神社神輿渡御順路」の記載の氏子名簿を基本に、修正と加筆を行った。

古文書研究と石造物調査班の解説結果とクロスさせるための中間報告資料として、会員に配布。また16年度郷土史展で展示する。

9月6日(月) 有志の調査

会員4人で観音寺のご住職をお訪ねし、間宮家関係のお話を

伺ってきました。

明治の初期に十数年間観音寺が無住だった時期があったことや、間宮家13代音次郎が書き留めた「間宮家先祖書」の資料を見せていただくなど新たな収穫がありました。

9月12日(日) 拡大役員会

- ・16名が参加、午後1時から、市立郷土博物館にて。
- ・「史談八千代」29号の掲載原稿の確認と編集調整の打合せ、目次作成を行いました。
- ・11月3日のやちよ市民サポートセンター祭りに参加することになりました。
- ・例会終了後、事務局5名で、郷土史展案内チラシの印刷作業を市民サポートセンターで行いました。

9月19日(日) 例会

- ・20名が参加、午後1時から、市立郷土博物館にて。
- ・展示の内容、テーマ名「旧高津村のすがた人と人々」、担当者を話し合い、決めました。
- ・機関誌記事内容の調整
- ・10月17日のバス見学会の見学場所の確認と参加者の確定
- ・例会後、市民サポートセンターで、「市民サポートセンター祭り」の展示内容を打ち合わせました。

10月3日(日) 例会

- ・19名が参加、午後1時から、市立郷土博物館にて。
- ・「史談八千代」29号校正
- ・展示の制作作業

10月17日(日) 史跡・建築・庭園を訪ねる バス見学会の報告

八千代市文化財保護の会の「市民文化祭 ふるさと八千代再発見 いまも各地に残る史跡建築・庭園を訪ねる」の行事に、当会から16名が参加し、埼玉県比企郡川島町の遠山美術館、野田市上花輪歴史館(高梨家)、流山市長岡屋(近藤勇陣屋跡)を

見学しました。

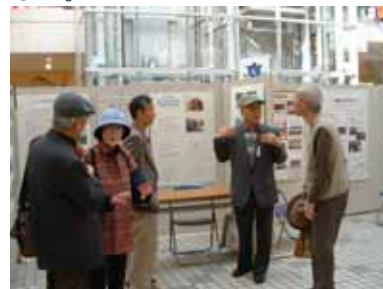
⇒詳細は3ページへ。

10月23日(土) 事務局の作業

- ・午前9時から7人が参加し、市立博物館で11月3日のやちよ市民サポートセンターのイベントに出品する今年度の活動記録の写真パネル作りをしました。
- ・「史談八千代」の最終的な編集をしました。

11月3日(休) こんにち“わ”ふれあいまつり

- ・フルルガーデン八千代でのサポートセンター祭り実行委員会主催のイベントに本会も出展しました。
- ・8時からの設営、10時オープンセレモニー、5時撤収に、延べ11名の会員が参加しました。
- ・会の紹介、今年度の活動記録の写真パネルと、16年度郷土史展ポスターの展示をし、チラシ配布をしました。
- ・本会の活動を知っていただくと同時に、市民活動を行っている38参加団体の親睦を深めました。



11月7日(日) 郷土史展準備

- ・13名が参加、午前9時から、市立郷土博物館にて郷土史展の展示物の制作作業をしました。
- ・昼食の休憩は、新川沿いで催された「源右衛門祭り」に参加、鍋料理をいただきました。

11月14日(日) 郷土史展準備

午前9時から、博物館と市民サポートセンターにて、展示制作と印刷作業をしました。

(以上の記録・文責は蔵)

10月17日(日) バスツアー見学会の報告

遠山記念館と 上花輪歴史館見学記 斎藤君代

平成16年度八千代市民文化祭参加行事として、八千代市文化財保護の会の主催により、今や古い民家建築が失われていく中で、周辺市町村の古民家活用、保存例として遠山記念館、上花輪歴史館を見学しました。

見学会は郷土史研究会員16名を含む36人が、秋の快晴の一日を楽しく勉強をさせて頂きました。村田会長、平野さん、中島さんお世話になりました。



★遠山記念館（埼玉県比企郡川島町）

川島町出身で日興證券の創業者である遠山元一氏が、没落していた生家跡に母美以の住いのために建てられた邸宅で、昭和8～11年にかけて完成。当時最高の建築技術と全国から集めた銘材で建築様式を異にする3棟を渡り廊下で結ぶ構成となっています。

母の没後に元一氏が接客に使用しその後、財団法人遠山記念館として昭和45年に開館し、建物の維持、保存をしていると学芸員の方のお話でした。

手水鉢が水琴窟になっているのが印象的でした。

★上花輪歴史館（野田市）

上花輪村に古くから居住し、醤油醸造を家業としていた高梨兵左衛門家（高梨本家）が永年保存して来た居宅や庭園、土蔵、屋敷林、社祠等建造物と生活用

具、醸造用具、地方文書を公開しています。邸内の建物は明和3年(1766)建設の門長屋から、昭和6年(1931)建設の母屋と時代の異なる建物が混在しています。



現在、刀剣の特別展で幕末に幕府より村役へ武器を与えという文書、エイ皮で作られ武士間で贈り物とされた飾り柄、鮫飾り板という珍しいものがありました。

近藤勇陣屋跡にて 成瀬摩希子

バスツアーの「遠山記念館」と野田市の上花輪歴史館を見学後、時間の都合で「一茶双樹館」ではなく、近藤勇陣屋跡の見学となりました。「誠」を頑固なまでに貫いた男たちの別れの地。流山も新選組を語る上で一つの聖地と言えるでしょう。千葉に住みながら、日野にはお墓参りに行っている、なかなか石碑一つ建つみの流山に足向けるチャンスがなく、「いつか行こう」と思いつつ日々を過ごしていましたが、バスツアーのお陰でやっと実際にその「聖地」を踏む事が出来ました。



この「近藤勇陣屋跡」は甲州勝沼の戦いに敗れたのち、新選組が流山に布陣したおりに、幹部が本陣とした造り酒屋の長岡屋の跡地です。流山に布陣しているのを東征軍に発覚した折、決戦も出来ず、一時は切腹を覚悟した近藤勇が再起を賭けて大久保大和として自首投降した地なものでした。長岡屋自体は跡形もないので、ただ、石碑の前にして、「ここが近藤さんと土方さん以下隊士との離別の地なんだなあ」と思いを馳せるのみ。この自首の段階では誰一人近藤さんが斬首になるとはきいと思ってもない訳で、なんだかいっそう悲しみが増します。近藤さん斬首を知った時、切腹を主張する近藤さんを説得して自首を勧めた土方さんの胸中はいかばかりだったか・・・。「あの時切腹させてやれば」と思ったに違いありません。ほろり。

長岡屋跡地に建つ酒屋秋元ではお土産の新選組グッズや、特製のお酒を販売していました。ツアー一行は皆手に手に、そのお酒を下げての帰路でした。その夜は「新選組！」を観つつ近藤さんの最期に思いを馳せていたに違いありません。

調査レポート

成田街道・大和田宿の旅籠 「往来旅人止宿銘々覚帳」 (文久三年)

酒井 正男

十七世紀、徳川政権の確立に伴い、幕府は参勤交代を軸に五街道（東海道・中山道・日光街道・奥州街道・甲州街道）を始め、全国の陸上交通網の整備を行った。街道の宿には休憩・宿泊施設を設け物資や旅人の輸送を行う人、馬継ぎを用意した。「佐倉道」は、五街道に次ぐ重要な脇街道の一つである。

十九世紀になると成田山新勝寺への参詣者が増え「成田道」と呼ばれるようになった。江戸

よりの参詣者は早朝に日本橋小網町より行徳船を利用し、一泊目は大和田宿、二泊目は成田近辺、翌日は、成田山新勝寺の参詣を済まし三泊目は船橋宿という日程が多かった。

大和田宿は、現在の国道 296 号線沿い、大和田村と萱田町に位置し、江戸方面より上宿、中宿と形成していた。管理は佐倉藩が行い、宿場陣屋は、現在の東京東信用金庫（ひがしん）の位置にあり、天保期～安政期の史料には、問屋兼名主惣助（萱田町）庄右衛門・小十郎（大和田村）の名前がみられ、この人達が宿場問屋事務を行っていた。

文久三年（1863）大和田宿の問屋惣助の書き上げた「往来旅人止宿銘々覚帳」（船橋西図書館蔵）に、当五月二十一日から六月十八日までの宿泊者を記載している。多くは成田山新勝寺の参詣客で、一日平均で、約 5 5 人の宿泊があり、往時の賑わいが窺われる。

宿泊者を受け入れたのは、「十兵衛・五兵衛・忠右衛門・新蔵・三左衛門」の 5 人の宿である。何故か六月十五日と十六日の両日だけは、「舛や・東や・林や・近江や・中村や」の旅籠名で記載されている。この銘々覚帳では、5 人の宿と 5 軒の旅籠がどう結びつくかは不明であった。

大和田宿の旅籠に係る記述は、多くの旅日記などに登場している。

1. 『成田の道の記』 著者不明・寛政十年七月（1798）

○～船橋より三里九町の程過ぎて、酉の半の頃やうやく大和田に至る。此の駅に、近江屋など入口にて、此方より右側、相応のやどりに侍れど、馬子の誘ひにより宿はづれ東のかた右側、ひがし屋五兵衛といへる酒など商ふ家にて泊まりもする由、今夜成田詣での殊のほか込み合ひぬれば、此のやどりの二階に休みぬ。

2. 『成田紀行』 石川雅望著・文

政五年三月（1822）

○～ここにて馬をかりて、荷おわせつゝ大和田へといそぐ。

（中略）～若ごまのあそぶ春のつながれて道ゆく人のあしもすゝまずもちひうる家に入て茶をのみて、くれぐれに大わたのうまやにつきてあずまやといふ家にやどりぬ。

3. 『鹿島参詣記』 北慎言著・文政七年五月（1824）

○～原二ツにわかれ先を青き原と云暮近く大和田宿中村屋に着ぬ舟橋より三里八丁ぬれたる衣など火に乾かして打臥す

4. 『成田山講中記（抄）』（成田山仏教図書館所蔵文書）弘化二年九月（1845）

○嘉永四年三月（1851）に新しく講をつくった大和田宿の世話人の名前がでている。（前略）

（嘉永四年三月）

同月廿一日新講

一金貳拾疋 大和田両町
大札七拾枚 林屋忠右衛門、
大沢小源次、柳屋吉郎兵衛、
東屋五兵衛、若竹屋次郎左衛門

世話人 中村屋三右衛門、升屋重兵衛、近江屋新兵衛、角屋善兵衛、藤や長兵衛、桜や伊三郎 宿大のや

5. 『成田山海道記』 幕末の成田山参詣記

○～大和田宿いつな権現社アリ近江や中村や若竹東や舛や等大家也。

6. 『観海漫録』 小川泰堂著・明治四年四月（1871）

○～正伯新田を過ぎて小金が原の野路を行くに、いと晴れやかにて、野馬の走り遊ぶを見る。もろこし華山のふもとを行く心地せり。大和田の宿に、暫しとて、中村屋三左衛門にやすらふ。船橋より三里八町といへり。

7. 『三峯山道中記図絵』 芝本久兵衛著・明治四年五月（1871）

○～それより上座新田村両側百姓家少々つゝ有松原をこし井野新田林屋という水茶屋あり。

○～是より松並木行下市場村爰に少しの水流あり徳川家の印旛沼より浜かた検見川筋へ掘割の場、小ばしかゝり此近辺に少々つゝ百姓家あり、右のかたは村上村米本村見ひ程なく大和田坂を登り、大和田宿榭屋重兵衛方に着す、暫休足し。「大和田の宿に盛りし花の客 散のこれるをひろふ馬かこ」「横道に心くはらぬ其人よ いつの幸ひおふわたの宿」是より名にしおふ大和田原に差しかゝり広々たる広原にして右の方遥ニ筑波山青々として四方の景色、青空へも登るかとうたがう有さまなり、野馬は其群れ群れに子馬引連ゆふと遊びける是東国の名産なるべし。

8. 『かくれみの』 正岡子規著・明治二十四年四月（1891）

○「隠蓑日記」に～伝舎に就くも、拒みて納れず。榭屋に投ず。此の日、始めて菜公麦伯を見る。○「かくれみの」の草稿に、～船橋の大神宮ニ参ル、それより馬にのりて大和田に来ル 大なる宿ハとめずウサンなる小さき宿に入る（略）同夜枕堅フシテ寝ラレズ・・・

などの記述があり、往時の大和田宿近傍の様子を垣間見ることができる。これら多くの記述より 5 人の宿と 5 軒の旅籠を結びつけることができた。

◎舛（榭、升）屋 十兵衛（重兵衛）

◎東（ひがし、あずま）屋 五兵衛

◎林 屋 忠右衛門

◎近江屋 新蔵（新兵衛）

◎中村屋 三左衛門（三右衛門）

林屋は、大和田宿でなく隣の井野新田の水茶屋のことで、同じ佐倉藩中につき名主惣助（萱田町）が宿場問屋事務を併せて行っていたためと思われる。

幕末の成田山詣「成田山海道記」にでてくる若竹は若竹屋次郎左衛門と思われる。

なお、正岡子規が大和田宿に明治二十四年三月二十五日に止宿した榭屋と有るのは、文言か

ら前述の6軒の旅籠との係りはない。当時から湯屋を営み、子規が宿泊したとの言い伝えのある柳屋は、成田講中記にある柳屋吉郎兵衛であったものと思われる。

今回の調査に当り、村田会長はじめ多くの方々のご助言によって、永年、懸案であった大和田宿の「往来旅人止宿銘々覚帳」（文久三年）の5軒の旅籠の結びつきを解明することができ感謝いたします。

岡崎市の大樹寺にて 牧野光男

愛知県岡崎市鴨田町に**成道山松安院大樹寺**という浄土宗の寺がある。松平家・徳川家の菩提寺として知られている。この寺に数多くの中世文書が残され、現在は岡崎市立美術館に移管されている。その原文書を見て勉強しようと誘われて八月初旬に見る機会を得た。まず文書を見る前にそのお寺はどのような所か見学する事になった。

名鉄東岡崎から北へ4km程行った台地にあり、かつては広大な境内を誇っていたが現在はその何分の一になっている。それでもかなり大きな境内である。重要文化財の多宝塔や東京・芝の増上寺の山門を思わせる山門、鐘楼など文化財の建物が人々を迎える。本堂への参道から山門を通して南を見ると、はるか向こうに今は小学校の門になった総門が見え、それを額縁にして岡崎城の天守閣が望まれる。これも家康と大樹寺とのかわりからだろうか。

永禄3(1560)年桶狭間の戦いで今川勢として戦った家康は、今川義元が撃たれたとの報に身の危険を感じて大樹寺に逃げ込んだ。寺は敵に囲まれてしまい、今は是までと先祖の墓前で自害する覚悟を登壇上人に伝えた。上人は経文の意味を持って諭し、家康を再生させたという。以後

この経文の文言は旗印となって家康の行列の先頭に立つことになる。今も大樹寺がジッと岡崎城を見守っているような感じである。



寺内は有料の見学コースになっていて**位牌堂**も見学できる。この位牌堂の正面には徳川家康の木像、右側に松平八代、左側に徳川十四代の位牌を安置している。十五代慶喜の位牌はない。

この徳川将軍の位牌は「等身大」とされていて、それぞれ大きさが記されている。最高は二代秀忠で家康より1cm大きく160cm、最小は五代綱吉の124cm、その次は家継135cmであるが8歳で没しているから相当であろう。では疑問の残る綱吉の124cmは如何なものかと、見学者一同の話題になる。

見学が終り住職の話も終わったところで、この位牌の大きさについての疑問が出たが、他の人の検証結果からその数字も間違いではなかろうという事になった。

このことは映画などでは問題されず、それなりの人が演じているが事実どおりでは様にならないので、無視されているのかも知れない。綱吉は館林藩主から宗家を継ぎ、大名などの綱紀肅正し学を好み湯島聖堂を建立したが、在位中は元禄の大地震・富士山噴火・江戸の大火などの天災と側近政治の弊害特に「生類憐みの令」により人々を苦しめ、「犬公方」とあだ名された。この人の裏に秘められた事実が表に現れた政治だったのかもしれない。

思わぬ歴史の事実、予期せぬところで出会う面白さに歴史探訪の楽しさを感じた。

(平成16年8月 記)

保品の道標(F12)データ採録 村上昭彦

10月23日(土)、新たに見つけた道標(F12)のデータ採録に保品を訪問した。場所は米本からのバス道路(県道68号線=八千代宗像線)の北を平行に走る小道、東栄寺霊園の三叉路。ここに二つ折れの道標。かなり損傷が激しいので拓本にて銘文判読する。

(上半部) 200×200×150

正面「馬頭」

右面「右 う (以下欠損)
さ (以下欠損)」

(下半部) 400×200×150

正面「世音」

右面「ら道」

左面「○
ば 道」

(注) 上半部左面及び下半部右面の一部はコンクリにて接合。

上半部と下半部をつなぎ合わせると、これはおそらく馬頭観世音の道標。右面は「右うすいさくら道」であろう。しかし左面「()ば道」は左にまっすぐ行くとバス道路に合流し、阿宗橋に抜けるからと言って「とせんば道」と断言するのはちょっと難しいか？

この道標の立地に疑問を覚えたので明治15年の迅速図を拡げてみた。よく見ると卍マークが二つ、そして菅原神社が渡船場に抜ける道の南側に記されている。最初の卍マークは東栄寺。

道標を通過するとすぐ天満宮の祠。きっとこれが菅原神社であろう。そしてバス道路との分岐点には須賀墓地。ここがもう一つの卍マーク。(墓地内に観音堂があったことを示す石碑あり)

どうやらバス道路に平行に進む、この小道こそが古道であったようだ。

《彰義隊士の妻の手紙について》

昨年（2003）の5月、村田会長より、「上野彰義隊資料室さよなら展示」というメールをいただきました。上野公園内の彰義隊墓所の脇にある資料室が閉室されることになり、25日にさよなら展示と彰義隊士子孫の小川潔氏による解説があるとのこと。さっそく上野へ出かけ、見学者の列に並んで展示を拝見し、墓守と資料館の管理をされてきた小川氏のお話をお聞きました。



上野彰義隊士の墓と資料館 03.5.25

展示の中で、私が目留めたのは、勝海舟へ宛てた戦士隊士の妻・木城花野さんの、「見せしめに放置され腐乱した隊士の死体を片付けさせてほしい」と嘆願した手紙でした。

読みたいと思いつつ、解説の実力がなくデジカメで撮影し、関和さんほか皆様にメールでお送りし、古文書教室さながらのネットでの解説。共に読み終えたとき、戊辰戦争の裏側の実態とその悲惨さ、そして決死の覚悟で筆をとった一女性の勇氣に心打たれました。

その手紙を皆さんにもご紹介したく、遅くなりましたが、今回関和さんに解説文と解説の執筆をお願いしました。（藤由美）

－彰義隊秘史－

勝海舟に宛てた花野の手紙 関和時男

彰義隊については、記録によると「積年の徳川慶喜に対する恩にむくい、その屈辱をそぐべきである」との主旨と「反逆薩賊の戮滅」が目的で幕臣が集まり（慶応4年2月23日）結成したと云われている。

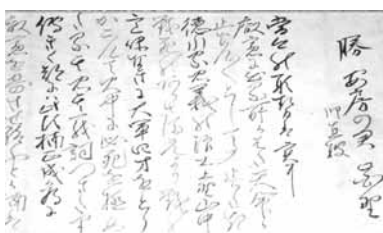
その席で渋沢成一郎（一橋家の奥右筆御政事内務係・渋沢栄一の従兄弟）が頭取、天野八郎（幕臣、敗北後脱出本所に潜伏し再起を計るが捕らえられ11月8日獄死享年38才）が副頭取に就任し、60余名が署名血判したとされる。隊士には若者が多く血気盛んで官軍兵の象徴である錦の袖章をキンキレと蔑称してこれを奪い取る等して挑発、衝突

を繰り返した。

その2ヶ月後の慶応4年（明治元年）5月15日、軍防事務局判事大村益次郎の作戦により雨とぬかるみの中で、上野寛永寺に立てこもった彰義隊の討伐が開始され、戦闘は早朝から始まり午後4時に彰義隊は聡敗北して5時前後に壊滅したといわれている。

戦闘後、みせしめのため死体を放置し酸鼻を極めたとされる。

次に述べる一文は、その現状を目の当たりにした花野（彰義隊士の妻）が、当時海軍奉行並に陸軍総裁であった勝海舟宛てに死を覚悟の上で差し出した手紙である。



－花野の手紙 読み下しの全文－

勝 安房の君

花野

御直披

當今の形勢は実に | 叡慮に出る所かは天命か | 止なんとして又止がたき | 徳川家忠義の浪士上野山中 | 戦死のあらさま元より戦の | 意味なきに大軍四方をとり | かこんで火中に必死を極めたる其忠其戦詞つきたり

伝え聞く都にはこの楠木正成が為に | 叡慮を寄せ給ふとか楠は | 南朝方なり然るを | 北朝の御皇統は末の世の | 今に至らざる御事の出来たる | はただ其の忠によるものなる | べし上野の宮へ討手を | むけられしはまた尊氏を | 例とやいわんさだめて | 勅定にもあるべきなれと思わず |

戦のこともおもわれ侍るいかで | 此の忠臣どもが大和だましひの | うごきなきを哀れむべき君 | 主はなくとも幸いに君尽力して | 千変萬化のおわすにあらざるや | 早く其のなきがらをうずめせめては | なき霊をなだめまふし | 尤も忠臣義士の死さま世の人に | 示さんには中々にかは | 弥の面目徳川家のほまれ也 | 一たびは人心をしてよろこばしめ | 二たびは人心をしていたましむ | 是をしも雨露にさらし | 日にかわかし長く泥土におく | ものならば其の怨みは

天下にあらん | 早くとうおさめんことを公に | なさしめ給へ官軍もかの | 楠を例とせばいかでか是をわろ | しと申さん此の事とくとかと | 申すなり婦の長舌も時世に | うそと糾さるるとも猶罪と | せられば座して死をまたん | のみ何とかすべき

あなかしこあなかしこ

上野山動かず

さらでほととぎす

鳴くとして血をはく

さみだれのころ

（注）文中の「|」は手紙の区切り

此の手紙には日付がない。おそらくは重要な手紙なので表書きにあるのだろう。内容から推察して5月15日のすぐ後であろう。

明治初期の手紙は封書であれば封書か手紙文の終わりに書くが、軽い手紙は季節の挨拶ですませたらしい。

日付をつけるのは証文の類で後日証拠になる重要な書類である。

此の手紙を読んで幕臣であった勝海舟は胸が痛んだ事であろうが何も出来なかった。

しかし、その後上野東臺において戦死した彰義隊士の遺体を曹洞宗円通寺「大禪佛磨大和尚」が決死の覚悟で供養した事により、官許が下り、遺骸266体を上野山内にて茶毘に附し円通寺（現東京都荒川区南千住）に埋葬した。当寺にある彰義隊士の墓は、昭和13年10月7日東京都文化財に指定された。



円通寺にある彰義隊士の墓

残念ながら上野の彰義隊資料館は人々に惜しまれ平成15年5月25日に閉鎖された。

編集後記

お知らせと報告が目的の通信ですが、論考や資料紹介などで充実した紙面になりました。寄稿、入力作業などのご協力に感謝します。

By.ゆみ

QWR07752@nifty.ne.jp